

主イエスは弟子たちを選ばれた後、汚れた霊に対する権能をお授けになってご自分が行くつもりであった町や村へお遣わしになりました。出発に当たって主イエスは弟子たちに注意や指示をなさいました。本日の箇所もその一部で、主イエスと人間との関係、そして「弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である」と、神様と人間との関係、あるいは私達の使命について語られております。

弟子たちは主イエスがこれから行こうとされている場所へ遣わされていくところでした。主イエスと弟子たちはずっと一緒にいたのではなくて、各地へ分担して宣教に行った事があるのです。聖書の先の方を見てみますと、遣わされていった弟子たちが役目を終えて帰ってきて、主イエスに報告するとともに、その与えられた力の大きさを互いに語り合っていました。汚れた霊に対する権能とは、病気を癒すことが主でしたけれども、当時不治の病と言われて病気が次々と癒され、人々の驚きは大変なものだったようです。主イエスはその時、静かに退いて休むように弟子たちに教えられましたが、ここに「弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である」の意味が込められております。

それは、これは神様の力であって自分自身のものではないということです。弟子たちがあたかもこの力を自分の努力や地位によって得たかのようなことになってしまいますと、主イエスが弟子たちにこれらの力を与えた意味が違ってしまいます。主イエスは天国の力、天国そのものを人々に伝えるためにこれらの力を弟子たちに与えられたのです。それを弟子たちが自分のものにしてしまうと、言い換えれば自分自身に栄光を帰してしまうことになれば、主イエスの意志は通じないことになってしまいます。そこで主イエスは出発のときに、「弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である」と、自分自身は神ではなく、天国の力を遣える器として選ばれたものであることを明確に示されたのでした。私達は神ではなく、神様の力を伝えるものとして選ばれた器であるのです。しかしそれで神様は十分とされているということなのです。神様は人間にとって一番よい道は、神様の器として用いることであると教えているのです。

さらに主イエスは、私達自身に、そして教会に与えられている宣教とはどう

言うことなのかを示されました。まず、「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである」。これは神様がすべての清める方であることを示し、私達が神様によって清められるべきことを伝えるのが宣教の最初の使命として示されているのです。そして「わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい」とは、主イエスがこの暗黒の世の中で伝えられて輝かしい天国の姿を、地の果てまで多くの人々に伝えなさいということです。当時の宣教には多くの困難がありました。特に命に関わる困難が人々の前に常にあったのです。「体を殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている」は、その緊張状況をよく現しています。宣教は神様の決断によるものであり、私達が喜んでその使命を果たすことが求められており、教会はそのために人々を備える努めが与えられているのです。そしてこの世での私達に対する決断が主イエスより求められておりました。「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う」。私達にとって、今この世での決断が神様の前にさばかれるということなのです。私達が神様の力によって十分に備えられ、この世への宣教の使命を果たす重要さが示されているのです。

この言葉は直接には宣教に派遣される際に弟子たちが主イエスより言われた言葉ですが、それにとどまらず、すべてのキリスト者への言葉でもあります。そして本日礼拝に出席している私達が、これから始まる一週間のそれぞれの生活に出ていく日、これを主日、日曜日と教会では言っているわけですが、この礼拝によってこの一週間、それぞれに場に遣わされていく私達自身への言葉でもあるのです。特に厳しさを感じる言葉ではありますが、私達はその使命を十分に果たし、神様の前に義と認められる存在に備えられていきたいものと思います。